

特集 教育・協同を考える

黄柳野の試みを共に学び・支えるために

杉本 時哉（東京都／協同総合研究所・理事長）

学校法人として認可を受けた黄柳野高校が発足して一年、協同総研としてこの画期的な実践を総括し、黄柳野を支え、また全国各地で新しい教育実践に携わる多くの人々と共に学ぶ。そのために協同総研会員有志による調査も予定したい。今年の秋の東北での協同集会に教育・文化を主題とする分科会を設け、出来ればその前に教育問題に絞ったシンポジウムも予定したい。そうした目論見をもって金城先生等と打合せ、加えて建設中の女子寮とその資金対策を含む運営の様子も伺おうと思った。

中同協や教育現場経験者の若干の方々と共に、一年半ぶりに訪れた黄柳野は前夜来の雪に包まれていた。折りから、黄柳野では、新しい年度の入学希望者の受付・体験入寮の受入れで大忙しだった。その最中に飛び込んだ我々に金城・神谷両先生や小島校長先生が時間を割いて応対して下さいました。

黄柳野のこの一年の実践については「つげの春秋」第4号（3月1日発行）で小島校長司会の座談会「初年度を振り返り、2年目にかける——それぞれの立場からの熱い思い——」が掲載されている。会員の皆さんの講読をお勧めする。いずれ上記調査による総括（日本福祉大の増山先生を中心に依頼）報告とあわせ、会員と教訓を共有することにしたい。

本号「教育特集」は、こうした次の年度の当研究所の基本的重点課題への一つのアプローチとして、黄柳野をはじめ各地の実践報告をお願いした。

今回の短い訪問を通じての黄柳野の実践の特徴を、私の掴んだ範囲で他とだぶらないよう若干つけ加えておきたい。

黄柳野では、徹底して子供たちの自主性、自発

性を尊重している。同時に全寮制の採用はよく知られている。授業への出席を強制しない分、補習や夜学を含む先生方の子供たちの単位習得を助ける上での負担は大きい。一年の祝祭日は一纏めにして、黄柳野独自の休日制度に置き換え、授業日数を確保すると同時に、帰省を保障し、家庭と子供の絆、交流も大切にしようとしている。先生方の熱意は、この学校の休みを利用した家庭訪問、父母との突き合わせにまで及ぶ。入学選考も一人ひとりをじっくり観察しながら行われる。成績や偏差値で画一的に切ることほしなだけで、徹夜の連続になる。

子供たち自身の成長は「自由で楽しい授業」「ここでは何でも自分たちでやらなきゃならない」「それってものすごく大変なことです」（仕事の発見誌。松崎女子寮委員長の発言から）や、HIVを一緒に考え、行動に移したこと、収穫祭りなど、数々の事実が証明してきている。地域との関係、労働を通じての学び。それぞれ緒についたばかりとはいえ、黄柳野が目指した教育理念は、着実に前進しはじめているように見受けた。

もちろん、教育とは百年の大計、社会全体のこれまでの歪みが、人々の意識に投影している影を克服して行くのは、子供たちだけの課題ではない。教育実践者だけの熱意に甘えていては、黄柳野の実践を発展させることは出来ない。学校法人の設立というハードの達成への満足感から黄柳野支援の熱意を後退させることは許されない。

黄柳野が2年目、3年目へと発展するにつれ、入学生も増え寮の充実はもちろん、多くの新しい課題、困難が続く。教育協同組合の結成を含めて、もう一回り大きく支え実践する組織と運営体制の確立が必要だと痛感しつつ、黄柳野を辞した。

共有するための発信を

“事、が始まり、勢いがつくと回りを渦のように巻き込み、見る間にふくらんでいきます。それがとりあえず最初の目的にたどり着くと、その熱気を維持することは難しいことです。“事、が成り立つのは、大きな渦や熱気が収まってから、地道な積み重ねの中で始めて形成されていくものではないかと思えます。マスコミではない“眼、でもって、伝え、そしてそれを受け取り、さらに伝えていくことの必要を感じます。遠くない将来、実践を通して見える課題を議論し、共有できる場を設定したいものです。前掲の杉本理事長が紹介されている「つげの春秋」第4号は、黄柳野のこの一年の大きな動きが伝わってきます、一部を抜粋しご紹介します。(編集部)

黄柳野の歩み

—これまでの略史—

一九九〇年四月。「偏差値」や「内申点」にとらわれないで「子どもの権利条約」に基づく人間教育をすすめる学校をつくらうと黄柳野高校設立委員会が発足しました。特定のスポンサーにたよらず大勢の市民の力で設立しようとするものでした。九月、地元の人々を中心に「人間教育をすすめる学園を共につくる会」が発足。それぞれの地域で教育市民運動をすすめると共に人間教育をすすめる学園(当面は黄柳野高校)を市民の力でつくらうとした市民組織です。愛知県に「設置計画書」を提出。しかし、九二年三月までの三回の私学審査会では「継続審議」となりました。九一年の末、「コーヒーク杯で学校を」と提案があり、本格的な市民運動へ発展していく契機となりました。九二年九月、「黄柳野高校設置計画」の「内示」が出、十月には(財)黄柳野学園設立準備財団の設立が愛知県から許可されました。

十二月から設立寄付金の募集開始。上條恒彦さん、岸田今日子さん、永六輔さんなどの文化人やコタダイ関係の方々の協力も得て広範な層に広がっていきました。町内会で、老人会で「曾

孫のためにも」と寄付してくれたご老人、学校でカンパ活動してくれた高校生、企業等大勢の人々。地域に広がりました。「自分達の学校を自分達も参加して、と黄柳野に期待する子どもたちが西へ東へとキャラバンを組みました。そして全国の仲間にも訴えてきました。この間、全国の中小企業家の皆さんが集まり「支援しよう」と「中小企業家支援の会」を結成しました。また、財団法人に寄付された不動産(山林、田畑、宅地、家屋)を買い取り、自然を守りそれを生かした取り組みをしようとして設立されたのが「つげ野の森市民ネットワーク」です。学校設立に大きな役割を果たしました。こうして九四年開校をめざす運動は発展しましたが、「資金不足」で一年の延期を余儀なくされました。「是非、「不認可」でも実践をして欲しい」との要望があり九四年四月から「黄柳野塾」として教育実践を開始しました。「ガンバレ黄柳野」のシールを貼り「黄柳野支援商品」を全国の数十万、百万の人々に届けて下さったのが(有)黄柳野企画です。学校設立運動初年度に発足した「共につくる会」は、全国に広がり、五一の地域で支部が結成されました。認可申請最後の時期、「市民立」にふさわしく爆発的ともいえる力を発揮しました。「黄柳野塾」での教育実践をすす

める一方で全国に訴え、九四年十月再度「黄柳野高校設立許可申請書」を提出。翌九五年二月に一〇〇万人を超える方々の熱い想いの結晶として学校法人の認可と黄柳野高校の設立が許可されました。四月、全国から二四〇余名の生徒が集い黄柳野高校が開校し同時にPTAも結成されました。設楽町ではあらたに「黄柳野塾・設楽」が開設しフリースクールとしてスタートしました。そして一年が経過しようとしています。黄柳野高校の設立に向け運動を続けてきたそれぞれの団体は今、あらたな段階での黄柳野の発展のため、力をあわせて前進しようとしています。

「つげの春秋」の購読を

年4回発行・年間購読料千円
 連絡先 〒444-16
 愛知県南設楽郡鳳来町大字黄柳野字池田663-1
 黄柳野高等学校/TEL(05363)4-0330
 郵便振替口座
 口座番号 00810-8-8332
 口座名称 「つげの春秋」編集委員会